



POINT 1

態度

自己調整学習を促すCAN-DOリストの活用

1 CAN-DOリストを活用した自己調整学習

この学習では、子どもたち自身が目標を設定することや多様な評価をする機会を設けることで、自分で学習を豊かにしていくことを目指している。具体的には、CAN-DOリストを作成する際に、学習評価のB基準を教師が示し、その上で目指すA基準を子どもたちが設定する形とした。そうすることで、子どもたち自身が学びの現在地を認識した上で、「次の目標」を明確に理解し、見通しをもって学習に取り組むことができるようになった。

また、A基準作成に当たっては教師から方向性のみを示すことで、子どもたちが自らよりよい姿を思考することをねらいとした。そうすることで、「よりよく伝えるにはどうすればよいか」という視点で、子どもが自身の学びを調整しようとする姿につながられるのではないだろうか。

2 モデル提示と比較により表現の質を高める

表現の質を高めるために、「望ましいモデル」と「改善が必要なモデル」を比較する活動を取り入れた。内容の違いに着目することで、相手意識の大切さや伝達に必要な情報、既習表現の活用の仕方といったポイントに気付きやすくなるだろう。

～内容面の比較のポイント～

- ★目的意識・相手意識
 - ・目的に合わせた必要な情報はるか
 - ・質問などを交えて、相手を意識した発表になっているか
- ★オリジナリティ
 - ・理由やエピソードなど、自分らしい内容が加わっているか
 - ・感想や考えが入っているか

パターンA	パターンB
Hello!	like... polar bear and udon.
I'm Koyo.	don't like ketchup, insect.
I like badminton. I practice it everyday.	I like dance.
It's fun.	I want to go to Vietnam.
What sport do you like?	
I don't like umeboshi.	
Do you like umeboshi?	
I want to go to New Caledonia.	
Thank you for listening!	

【比較のためのモデル提示の例】

3 学び方の選択と対話を重視した指導

子どもたちが自律的に学習を進められるよう、学び方の選択肢を複数提示することを意識した。その上で、教師が明示して指導する場面と、対話を通して子どもたちから表現を引き出す場面とを意図的に使い分けた。場面を分けた指導により、基礎的・基本的な知識の理解を支えつつ、子どもたち自身が主体的に考え、表現しようとする姿を引き出すことにつながった。

～子どもたちと共有した学び方の具体例(抜粋)～

- ・目標に立ち返る
- ・前時の学習を生かす
- ・デジタル教科書で音声聞いて繰り返す
- ・録音・録画をして見直す
- ・友達と伝え合う、相談する

CAN-DOと目的・場面・状況	CAN-DO到達度
[CAN-DO] 理想の一日の過ごし方を伝えることができる。 [目的・場面・状況] ★ クラスの友達に発表しよう。 ★ 今まで伝えてない考えを積極的に伝えよう。	A 自分と対等に 買入っている。強弱をつけ、相手に依りやりによりに工夫して発表する。 B 例や教科書を参考に、一人で自信をもって、理想の一日の過ごし方を伝えることができる。 C 友達や先生に教えてもらいながら、理想の一日の過ごし方を伝えることができる。 D 理想の一日の過ごし方を伝えることはまだ難しい。
○時間目 本時の課題 Today's goal 単元の見直しを持つ	AB CD 【CAN-DO達成に向けて】 今日の感想・気づき・疑問・次回の目標
①	C Playの使い分けがわかった。発表にも自信が持てた。I haveの使い分けも次回にまよった。
② 理想の一日をしようしよう。	B+ アイロンの見直し。1日を紹介することができた。工夫して発表できた。次回からは発表の準備を頑張りたい。
③	A 紙をみずに言うことができた。声も強弱にも気をつけられた。
④ 頻度を表す言葉も使いこなす	A Usuallyの発音がまだ難しい。何かか買入れている。4人の中で少し言えたから良かった。教科書のリスニングも全問正解だったから、ちゃんとして

今日

Unitを通して知ることができたこと、わかったこと、できるようになったこと
 今まで話したことを言いたかった。たいてい、強弱をつけたり、相手の顔をみてしゃべるのを意識できた。Playの使い分けや、頻度の言い方が分かった。頻度の言い方、これからは、もっと頑張りたい。

【目標達成&振り返りシートの例】

通した授業改善の工夫

鹿追町立鹿追小学校 教諭 川上 光陽



小学校3学年

小学校5学年

中学校1学年

POINT 2

思・判・表

やり取りの必然性を生む言語活動の工夫

1 「本物」を意識した場面設定

実際の海外のレストランでのやり取りを想定し、入店から注文、会計までの一連の流れを含んだ言語活動を設定した。表現の反復練習にとどまらず、「店員として注文を受ける」「客として自分の食べたいものを伝える」という役割を演じることで、英語を用いる目的や場面が明確になるように留意することが望ましいだろう。

また、単元を通してやり取りの流れを段階的に扱うことで、既習表現を繰り返して活用する機会を確保した。このように、本物に近い状況設定により、子どもが場面を具体的にイメージしながら、意味のあるやり取りを行おうとする姿につながるのではないだろうか。

【ロールプレイ活動の例】

2 会話が続く仕組みの工夫

会話が一往復で終わる形式的なやり取りとならないように、「Anything else?」などの表現を取り入れ、実際に海外で行われるやり取りのように会話が自然に継続するよう工夫した。また、注文内容や会計といった状況に応じてやり取りが変化する活動とすることで、相手の発話を聞き取り、それに応じて考えながら応答する必然性が生まれるように工夫した。

加えて、オリジナルメニューの作成を取り入れることで、やり取りの内容が固定化されず、子ども自身の考えが反映されるようにした。このことで、既習表現を活用しながら、やり取りをさらに発展させようとする姿が見られた。

3 評価を取り入れた目的意識の明確化

接客の様子に応じて評価（チップ）を付与する仕組みを取り入れた。評価の観点として「英語で伝えているか」「やり取りがスムーズか」「丁寧さがあるか」を示すことで、子どもたちがよりよいコミュニケーションを目指す視点をもって活動に取り組むことができるように留意した。子どもたちの学習活動を通して、「おすすめ」の英語の言い方や好みを聞く方法を考えるなど、意欲的にやり取りを繰り返し、表現の改善を図ろうとする姿につながられるだろう。

また、チップという文化的要素を取り入れることで、子どもたちの海外の生活や価値観への関心を高め、言語活動を異文化理解と結び付けることを大切にして指導をしていきたい。

【チップを活用した取組】